1P-C40　アカメガシワ(Malloti Cortex)の薬史学的研究

（帝京大・薬）木下武司　○姜東勲　成松紳太郎

【目的】アカメガシワはトウダイグサ科落葉小高木で、本邦各地の二次林に先駆植物として出現するごく普通の植物である。本種の樹皮は日本の民間療法で胃酸過多、胃潰瘍などに用いられ、日本薬局方には第十四改正から収載されている。中国名を野梧桐と称し、「中国薬植図鑑」には「胃潰瘍を治す」と記されているが、本草綱目などの歴史的本草書には全く記載がなく、日本での知見をもとにしたものと思われる。しかしながら、日本でのアカメガシワ樹皮の薬用に関して、多くの文献は古くから民間療法で用いられたとあるだけで、その歴史的経緯については極めて曖昧である。演者らは、江戸時代の民間療法書、中国および日本の本草書について、基原の類似する生薬の記述を考証した結果、キササゲとの基原の誤認による可能性が高いことが明らかになった。

【考察・結果】アカメガシワの名は歴史的に新しく、まず、その古名を突き止める必要がある。方言名の中には古名がしばしば残されているので、日本植物方言集成ほか諸文献を検索したところ、アカメガシワの方言名としてヒサゲ、ヒシャギ、カワラヒシャギの名が中国地方、四国、九州にあることがわかった。この名は萬葉集の「烏玉之（ヌバタマノ）　夜乃深去者（ヨノフケユケバ）　久木生留（ヒサギオフル）　清河原尓（キヨキカハラニ）　知鳥數鳴（チドリシバナク）」（巻六　〇九二四、山部赤人）など四首に詠まれる「ヒサギ」と同じと考えられる。この名は最古の風土記である出雲國風土記にもあり、自生種であることは明らかである。日本では古代から一貫して中国本草にその漢名を求めてきた。平安中期成立の和名類聚抄（源順）に「唐韵云　楸　音秋小葉　漢語抄云　比佐岐　木名也」とあり、ヒサギに楸の漢名が与えられた。ところが、説文解字に「楸は梓なり」、「梓は楸なり」、また爾雅釋木に「椅は梓なり」、同郭璞注に「卽ち楸なり」とあって、梓・楸は同物、異物のどちらかはっきりしない。陸璣詩疏に「楸の疏理白色にして子を生ずる者を梓と爲す」とあるから、少なくとも楸・梓は互いに酷似したものであることがわかる。梓の樹皮は神農本草経中品に梓白皮として収載され、楸の樹皮は本草拾遺（陳藏器）に楸木皮として初見する。梓白皮・楸木皮について中国本草書等を考証した結果、梓はノウゼンカズラ科キササゲ、楸は同トウキササゲであることが確認できた。この両名が日本の文献に出現するのは江戸時代になってからであるが、江戸後期になるとその基原植物はアカメガシワとされ、この時点で梓白皮の基原はアカメガシワとなってしまった。名医別録に梓白皮の薬効として「吐逆胃反」とあるので、アカメガシワ樹皮もそれに則って使用されたのは想像に難くない。たまたま、アカメガシワにはベルゲニンという胃液分泌抑制作用成分が含まれていたので、そのまま抗潰瘍薬として定着したのではないかと思われる。生薬名が和名となったのは、明治維新で漢方医学が正規医学でなくなり、漢名を用いるのを憚ったと思われる。